
最後のプレゼント

らんらら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最後のプレゼント

【Nコード】

N9296E

【作者名】

らんらら

【あらすじ】

トマトの嫌いな少女マトリン。大好きな従兄弟のクリスマス兄さんがクリスマスには帰ってきます。今年こそ、一緒に踊ってもらいたいもの。可愛い恋と家族と、少しでも不思議なクリスマスのものがたり…

『最後のプレゼント』

やっぱり、素敵。

マトリンはちらりと相手を見つめます。

窓からの昼下がりの光の中、金色の髪がきらきらして。

その横顔。優しい口もと、長いまつげ。

胸がとくとくして。

息苦しくて。

手に持つ本で、顔を隠します。

マトリンはトマトの嫌いな女の子。今年、十歳になります。

トマトは嫌いだけれど12月は大好きです。大好きなクリスマス兄さんがクリスマス休暇で帰って来るからです。

隣に住んでいた従兄弟のクリスマス兄さんは大学生になって遠い街に行ってしまう。小さい頃から遊んでくれた優しいお兄さんが遠くに行ってしまった日には、マトリンはこっそりたくさん泣きました。

久しぶりに会ったマトリンの大好きなクリスマス兄さんは、随分大人っぽくなっていました。自分で買ったという赤い小さな車から降りたとき、マトリンに手を振ってくれました。着ていた白いコートが風にふわりと揺れました。

マトリンが密かにその大きな背中や、逞しい手に胸をときめかせたことをクリスマス兄さんは知りません。かけよって抱きしめたかったの

に、恥ずかしくて出来なかったことも。

「マトリン、マトリン」

ママの呼ぶ声。

「ママが呼んでいるよ？いいのかい？」

「どうせお手伝いしなさいって言うの。だからいいの」

マトリンはクリスマス兄さんのお部屋の大きなベッドにごろんと横になつて、たくさんあるクリスマス兄さんの本からお気に入りの物語を引っ張り出して読んでいました。

階下ではマトリンのママと、そのお姉さんのクリスのママが、クリスマス準備のためにジンジャークッキーを焼いています。香ばしいバターが焼ける匂いにマトリンは長い金色の髪をシーツに泳がせて何度も寝返りを打っています。

そろそろ、三時のお茶の時間。

マトリンはイスに座って本を読んでいるクリスに、ふと思い出したように言いました。

いえ、本当はずつと言いたかったのだけれど、ときどきしてしまうので、なるべくそれを顔に出さないようにとタイミングを計っていました。

ゴロゴロしたのもクッキーの香りのせいじゃなくて、早く言わなくちゃとあせっていたのです。だって、クリスマスの夜はどんどん近づいてきます。

けれど、静かな横顔のクリスは気付かない様子で、真剣に何かを読んでいます。

「あのね。クリスマスさん」

クリスが本から顔を上げました。

その緑の瞳に見つめられてドキドキするのは何もマトリンだけではありません。だって、ママでさえステキな青年になったわねと頬を染めていたくらいなのです。

「クリスマスの夜、一緒に踊ってね」

言いました、ついにマトリンは言いました。いえ、目標はもう少し高かったのだけど、今はまだそれが精一杯。

例年、クリスマスはマトリンの家に伯母さんや伯父さん、少し離れた町に住むお祖母ちゃんとたくさんのお従兄弟が集まるのです。リビングのソファやクッションは取り払われて中央にクリスマスツリー。すでに準備は整っています。毎年必ず誰かがダンスを始めて、マトリンも小さな頃から伯父さんのリードでくるくる回って喝采を受けたものです。親戚の中で一番年下のマトリンは家族のお姫さま。

ここ数年は少し恥ずかしくて踊っていなかったけれど、今年はクリスマスがいるのです。

新しく作ってもらったフワフワしたワンピースを着ると心に決めています。

そして。

一緒に踊って、マトリンの手を引いてくれるのはもちろんクリスマス兄さん。他には考えられません。

けれど。次にクリスが言った言葉にマトリンはひどく落胆しました。「ごめんね。マトリン。僕はクリスマスの三日前からバイトで忙しくてね。二十六日に帰ってくるんだ。だから、今年はパーティーにも出られないんだよ」

優しく笑って立ち上がると、ベッドに起き上がっていたマトリンの頭をなでてくれました。

マトリンがよほど悲しい顔をしていたのでしょう、大きな手で抱きしめてくれました。

「よしよし」

「やだ！私子供じゃないわ！」

マトリンは熱くなった頬を押さえて、クリスを見上げました。

「アルバイトなんて必要ないのに」

八つ当たりのマトリンに、やっぱり子供だとくすりと笑って、青年はクローゼットから何かを引っ張り出しました。

それは、真っ白いフワフワした毛皮のついた、真っ赤な。そう。

この季節にあちこちで見る。サンタクロースの衣装でした。

「ほら、これを着てお仕事なんだよ。マトリンは兄妹や従兄弟の中で一番末っ子だから、サンタクロースのこと好きだろう？だから打ち明けたんだよ」

「ケーキ屋さんの呼び込みなの？それとも、デパートのビラ配り？」

マトリンは口を尖らせたまま両腕を組んで胸をそらせます。マトリンが喜んでくれると思ったのでしょうか、クリスは少し残念そうな顔をしました。

マトリンはそれどころではありません。

せっかく勇気を振り絞って、ダンスの申し込みをしたのに。

「私、クリスマスさんがそんな格好になるのは嫌だわ」

「大切な仕事なんだよ。子供たちにプレゼントを配るんだ」

「分かった！教会のボランティアね！？優しいクリスマスさんらしいけれど、家族を犠牲にしてまですることじゃないと思うの！せっかく、久しぶりに帰ってきたのに！会えなくてとっても寂しかったのに」

「寂しかった？」

そこでマトリンは慌てて口を押さえました。

くくく、とクリスは響く声で笑います。

「マトリン、僕はお仕事でサンタクロースになるんだよ」

そんなの分かっているわよと頬を膨らめるマトリンに、クリスは笑いながら続けます。

「ほら、サンタクロースは世界に一人きりって言うわけじゃないだろ？僕はこのあたりを任されたんだ。三年間ずっと、サンタクロース

スになりたいって申請してやっとなれたんだよ」

「そんなにステキなお仕事なの？クリスマスパーティーを諦めて？皆、来るのよ？クリスマスにだってたくさんプレゼントが届くのに」

「大切なお仕事だからね。ほら、似合うだろ？」

そういつてクリスは髭を顔に当てて見せました。優しい瞳とすんなりした顎にそれはなぜか似合っていました。

ひげの下の笑顔にマトリンはまたドキドキして、じっと見詰めていられなくなっていました。

「じゃあ、サンタさん、マトリンにもプレゼントくれるの？」

「そうだよ、マトリンの寝ている隙にそっと入ってきて」

マトリンはドキドキがひどくなつて胸を両手で押さえました。

大好きなクリス兄さんがたとえサンタのお仕事のためだといつても、そんな風に会いに来てくれるのはとても嬉しい。

「わかったわ！私、イヴの日は、絶対に寝ないで待ってる」

あははは。

クリスは笑いました。

「それじゃ、サンタクロースが困るじゃないか」

クリスがいたずらに白い髭をマトリンのほっぺたに当てました。

それはくすぐったくて、少し甘い蜜の香りがしました。

クリスマスの二十四日。本当にクリスはお出かけしたままで。

そのためにマトリンは誰に誘われても踊ろうとしませんでした。せっかくステキなワンピースなのに。今日はお気に入りブルーのリボンで決めたのに。

壁際においた自分のイスに腰掛けて、みんなの様子を眺めていました。

でも夜中には。

きつと、クリス兄さんが来てくれる。

そうだ、せっかくおめかししたんだから、このまま待っていていようかな。

「マトリン、可愛いドレスだね、一緒に踊ろうよ」

マトリンの三つ上の従兄弟のトーマスがマトリンの手を取って引つ張ります。

「いいの、私、今日は踊らないの。階段で足をひねって少し痛いから」

「なんだ、そうか。じゃあ、チキンを取ってきてあげるね」

優しいトーマスを見送って、マトリンは次に近寄ってきた伯父さんに笑いかけます。

「おや、マトリン。今日はやけに大人しいじゃないか。そうしているとお母さんにそっくりだね」

「やめてよ、伯父さん、ママには似たくないの」

ははは。おじさんは赤くなった顔いっぱい笑顔になって笑いしました。

「ほら、そういう言い方も、そっくりなんだ」

マトリンは大いに気分が悪くなって、ぷくつと頬を膨らめました。

おじさんはそれを見て余計に楽しそうで、手に持っていたシャンパンのグラスが空になると五杯目を飲もうとテーブルに戻っていきましました。

ママは大嫌い。

マトリンはイスの上で膝を抱えました。

だって、パパを連れて来てくれない。

マトリンのママとパパは離婚して、今は離れ離れで暮らしています。パパに会いたいのに、ママの許可がないと会いに来られないのです。

私は会いたいの。パパも私に会いたがっているのに。それをママが決めるのはおかしいわ。

マトリンにはそれが納得できないのでした。

その夜。

階下ではまだ大人たちが楽しそうに笑っているけれど、マトリンは一番小さいこともあって、二階の自分のお部屋へと上がっていきました。

いつものクリスマスなら、一人先に寝るのはつまらないといって駄々をこねるマトリンですが、今日は違います。

「あらあら、珍しくいい子なのね。いい子にはきつと、サンタさんが素敵なものをプレゼントしてくれるわよ」

ママのこの言葉はマトリンを満足させました。そう、クリスマスのサンタクロースが来てくれるのです。プレゼントよりそれが嬉しいのです。

そうよ、そのために。クリスマスに会うために早くベッドに入るんだから。

そうして、マトリンはいつクリスマスが来てもいいように、ふわふわのワンピースのまま、ベッドにもぐりこんで部屋の明かりを消しました。空はお月様が出ていて、窓からさす灯りは、青く白く、床を照らし出しています。

マトリンはじっと目をつぶっていました。

トーマスが母親鳥のようにたくさんの食べ物を運んでくれたので、マトリンはお腹がいっぱいで、気をつけないと本当に眠ってしまい

そうです。

ふっと頭が真つ白になりかかるたびに、だめだめ、と小さく頭を振りしました。

何度目か、そんな風にしたときです。

カタンと音がしました。

クリスかな。

マトリンはそつと布団の中の手を握り締めました。

ドキドキして、この音がクリスに聞こえちゃうんじゃないかと本気で心配していました。

がたん、がさがさ。

誰かが。窓から入ってきました。

暖炉がないから、窓なんだな。危ないお仕事だな。

そんな風に思ったとき、ふわりと夜の風と一緒に甘い香り、そう、あの白い髭の香りがしたのです。

クリスだわ！

そこで、マトリンは目を開けました。

「わ！」

驚きました。

すぐ目の前に覗き込むサンタクロース。

月明かりの中でも、ぼんやり白く光っていて、優しい緑の瞳が笑っています。

「クリス兄さん！」

ぎゅっと抱きついてしまいました。

だって、だって。

ずっと待っていたんだから！

「マトリン、いい子にしていたかい？」

マトリンは大きく頷きました。

「じゃあ、プレゼント、何がいいかな」

「プレゼントはいいの、クリスマスさんとダンスがしたいの」

サンタクロースはおやおや、と笑って、マトリンの手を引くと床に立たせました。

不思議と手をつないでいるとマトリンも同じように光っているみたいです。窓が開いているのに全然寒くない。

床もひんやりしないのです。

「ね、踊りましょ」

けれどクリスマスさんは困ったように首を傾げました。

「今夜は忙しいんだよ。困ったな」

「じゃあ、一緒に行くわ」

「お仕事だから、小さなマトリンには難しいよ」

「大丈夫！だって、プレゼントを配るだけでしょう？それに、私もときどき窓から出て、屋根を伝って隣のお部屋へ入ったりするの。

得意なのよ」

「大変だよ？」

「平気なもの！」

クリスマスさんは笑って、じゃあ、お手伝いしてもらおうかなと言ってマトリンに着ていた赤いマントを付けてくれました。

それは温かくて、優しい甘い香りがして。

それから、ちょうどマトリンが着ていた真っ白なワンピースにとっても似合って可愛らしかったのです。嬉しくなってマトリンはクリスマスさんの後について、窓の外に足を踏み出しました。

「おっと、忘れちゃいけないね、ほら、これをはいて」

裸足だったので、クリスマスさんが担いでいた白い袋から、赤茶色の上質なブーツを出してくれました。

誰かへのプレゼントなの、と尋ねるとクリスマスさんは小さくウインクしました。

屋根の上にはうつすら白い雪が積もっています。いつの間にか降っていたのです。マトリンは気付かなかったので、真っ白に見える街並みを嬉しそうに眺めます。

「さ、マトリン、急がないとね。まずはほら、隣の窓からトーマスに届けるんだよ」

「そうね、あのね、今日トーマスはとっても優しくったの。親切にしてくれたのよ」

「そうだね、じゃあ、マトリンが届けてみるかい？」

マトリンは少し緊張しながら頷くと、クリスマスさんが開いてくれた窓から、とんと降り立ちました。

部屋の中は薄暗くて。マトリンは床に自分の影が映るのを不思議な気分で見えていました。

ぐっすり眠っているトーマスの枕元に、マトリンはクリスマスが渡してくれたプレゼントの箱をそっとおきました。それはトーマスが前からほしがっていた飛行機みたいでした。

「メリークリスマス、今日はありがとう」

そう小さく挨拶して、マトリンは頬に軽く口付けをしました。

「むにゃ」

トーマスは眠ったまま嬉しそうに微笑みました。

そのまま寝返りを打って、お布団を抱きかかえるようにして背を向けてしまいました。

窓から外に出ると、クリスマス兄さんが待っていました。

「さて、お隣に移らなきゃいけないんだ。おいで」

そう言ってマトリンの手をとります。

足元はもう屋根の一番端。雪も積もっているし、なれないブーツでマトリンは怖くなりました。月明かりで雪は青く光っています。

いつの間にかクリスマス兄さんの手をぎゅっと握り締めています。

小さく見える庭には、飾ってあるスノーマンのお人形が見えます。

人形に雪が積もって本物のスノーマンだわ、それをクリスマス兄さんに報告しようとした時です。

お兄さんは小さな口笛を吹きました。

音もなくふわりと。

影がマトリンを覆います。何か月明かりをさえぎったのです。足元ばかり見ていたマトリンは怖いのも忘れて空を見上げます。

それは、大きなトナカイでした。

マトリンは本物の馬を見たことがありましたがそれに似ていると思いました。もつと細くて小さなものを想像していたのに、それはとても大きいのです。見上げないと視線が合いません。馬よりは細い口が二カツと開いたかと思うと白い息が風に広がります。

「今、ねえ、今笑った!」

「気のいい奴だからね」

クリスマス兄さんの言葉に応えるようにトナカイはツヤツヤした枝のよな角を傾けて、クリスマス兄さんの肩に擦り付けています。

「よしよし、甘えているんだよ」

「すごい!」

「驚いた?」

「うん、素敵、素敵!」

マトリンもそつとトナカイの頬に手を伸ばします。マトリンが触るまでじっと待っていてくれたようです。さらりと温かい。

マトリンが嬉しくなって笑うと、トナカイもまたにかつと口を広げます。

そこでマトリンは気付きました。

トナカイは宙に浮いていました。小さな金色のそりを後ろにつけて、そこにはまだたくさん白い袋が乗っています。

これは夢かもしれない。

マトリンは思い出しました。

サンタクロースなんていないのに、こんな夢を見ていて、私ったら寝ているんだわ。

どうしよう、今クリスマスさんが来たら会えない。

「どうしたの？」

サンタクロース、夢の中のクリスマスさんはにっこり笑ってマトリンの手を引きます。

「大丈夫だよ、ほら、おいで」

「あのね、今は夢の中なの？」

マトリンはふわりと抱き上げられて、気が付けばトナカイの背にクリスマス兄さんのサンタクロースと一緒に乗っています。

「そう思うのかい？」

穏やかに笑うクリスマス兄さんは金色の前髪をゆらりと夜風に揺らし、す。綺麗な緑の瞳。見つめられるとドキドキしちゃう、それは夢でも同じだわ。

マトリンは迷いました。

夢でも、クリスマス兄さんに会えるなら、ううん。

夢なら、何を言っても、何をしても大丈夫なのかもしれない。

それにこうしてサンタクロースになり切って二人きりでクリスマス
の夜をトナカイでデートするのも素敵。
本当じゃなくてもすごく素敵な夢だわ！

マトリンは首を大きく振って、後ろから支えてくれるクリスマス兄さん
にそつと背中を預けます。温かい、とくどくした鼓動が聞こえるよ
うな気がします。

ピーー！！

ちょうど、トナカイが二人を乗せて静かに地面に降り立った時でし
た。

何処からか甲高い笛の音がしました。

「じー！」

背後から怒鳴る声。

見ると黒い人影がマトリンの家の前の通りを走ってきます。どうや
ら警官のようです。

「いけない」

クリスマス兄さんはトナカイの手綱をぎゅと引きます。

トナカイはクンと小さく鳴いて走り出しました。

「なあに？どうして追いかけてくるの？」

「この頃は物騒だからね、泥棒と間違えられるんだ」

「大丈夫よ、ちゃんとサンタクロースだって分かれば許してくれる
わ」

けれどもトナカイは止まらずに走り続けます。

そのうち、サイレンが鳴り出しました。パトカーです。

それはだんだんと近づいてくるみたいで、マトリンは後ろを振り向

きましたが、背中をぴったりと支えてくれるクリス兄さんの大きな肩で見えません。

「掴まったらダメなんだよ、マトリン。僕には時間がないんだ。プレゼントを配ってしまわなきゃいけないから」

「なんだか、盗賊とお姫様みたい」

くくく、と背中でクリス兄さんが笑ったのを感じました。

まだサイレンは追いかけてきます。

二人を乗せたトナカイは少し重たそうで、一生懸命走っています。遅い時間だからもう通りに人はほとんどいません。

「その怪しい奴、止まりなさい！」

ついに、警官の叫ぶスピーカーの声が聞こえるほどになりました。

クリスは、ますますトナカイを速く走らせます。蹄が雪を蹴り上げ、後ろのそりは右に左にとゆらゆらして。トナカイは少し疲れたように白い息をたくさん吐き出しています。

「頑張つて！」

マトリンがその頭をなでてあげると、大きな真つ黒な瞳がくるりと動きます。長いまつげには霜が凍り付いてキラキラ光る。瞬きと同時にきらりと星のような氷の欠片が風に流れていきました。

ビルやアパートの立ち並ぶ駅の近くまで来ると、ぐんと曲がって、狭い路地に入りました。ここなら車は追ってこられません。

「待てー！」

パトカーから降りた警官が、走ってきたようですが、そんな速さでは追いつきません。

「えへへ、やったね！」

マトリンがぎゅっとトナカイの首に抱きつきました。

そのときふわりとマトリンの被っていたフードが風に飛んで、金色の長い髪が広がります。ちょうど、パトカーのサイレンの音や警官の声で家々の窓から人が顔を覗かせます。

「サンタクロースだ！」

頭上のどこかで小さな男の子の声がしました。

「困ったな」

クリスは狭い路地でトナカイを歩かせながら、後ろを振り向きます。
「子供に見られるとサンタクロース失格なんだ。せつかく採用してもらったのに」

「サンタクロースでいられなくなるの？」

「そっだよ」

「空を飛んだら？」

「もっと目立ってしまうだろう？」

「じゃあ公園で」

人のいないところと考えて言いかけて、マトリンはいい事を思いつきました。

「ね、お家に帰りましょう？温かいし、誰にも見つからないわ。だって、クリスのおうちだもの、サンタクロースのクリスがいたっておかしくないでしょ？きつと皆喜ぶわ！」

クリスはそこでトナカイを止めました。

街の路地裏。薄暗いビルの影に、小さな青白い街灯の下。ささ、と猫らしい陰がどこかに隠れました。

ひらりと飛び降りると、マトリンに手を差し伸べます。

嫌な予感。

「私だけ置いて行っちゃうんでしょ？いやよ、一緒に行くんだから」
トナカイの首にしがみつくマトリンの背を、クリスは優しくなでま

した。

「違うんだよ、マトリン。トナカイは目立つからね、ここからは歩いていくよ。また必要になったらいつでも呼べるからね」

温かいトナカイの背中から見つめると、丁度同じ高さにあるクリスマス兄さんの瞳が優しく笑いました。

「ね、お家に帰りましょ」

こんな風に誰かに追いかけられるし隠れなきゃならないし、高いところにも登らなきゃいけないし。それに、パーティーにも出られない。

「サンタクロースは大変だわ。危ないわ」

クリスマス兄さんはマトリンの髪をそつとなでました。

「さ、降りて」

仕方なくマトリンは引きずられるように硬い地面に降り立ちます。

「クリスマス兄さん、もう帰りましょよ」

マトリンは拗ねたように足元を見つめます。クリスマス兄さんの足元にはたくさん白い袋が置かれています。振り向けば、いつの間にかトナカイは姿を消していました。

「ね、マトリン。わかってほしいんだ。僕はサンタクロースの仕事が大好きなんだよ。みんなが待っているだろう？マトリンのようにベッドの中で今か今かと待っている子供たちが大勢いるんだ」

「なんだか、嫌だわ。クリスマス兄さんはマトリンだけのサンタクロースでいてほしいもの」

わがままだと分かっています。

それでも、これは夢なんだから。言いたいこと言っていていいんだとマトリンは思いました。

だから、クリスの真っ赤な服をしっかりと抱きしめています。

「マトリン、いい子でないとそばにいられないんだ」

「え？」

ふわりと風が吹いて、その冷たさにマトリンは驚きました。
さっきまで寒さなんて感じなかったのに。

「待って！」

目の前のクリスマス兄さんが薄くなつてしまったようなのです。
赤い色は向こうの雪が透けて見えています。

消えちゃう？私が悪い子だと消えちゃうの！？

まだまだ、この素敵な夢を見ていたい。

「やだ！ごめんなさい！私もお手伝いするわ！だから、ね！消えないで。まだ夢から覚めたくないの！」

「じゃあ、手伝ってくれるかい？僕はいつもの優しいマトリンが好きなんだよ」

その言葉はマトリンを真つ赤なトマトみたいにしました。
ときどきして、ふわふわして。

何とかうなずいたマトリンに、クリスマス兄さんは飛び切りの笑顔をくれました。

「さあ、行こう。夜明けまでに配ってしまわないとね」

袋の一つをマトリンも拾い上げて、そうしてクリスマスと目が合つと笑いました。

「うん、私もがんばるわ」

それから二人は、アパートのらせん階段を上つて、途中から二階のベランダへと飛び移ります。

「怖かったらう？よくがんばったね」

そう褒められるとマトリンはもっともつとがんばりたくなります。

子供部屋の窓だけは不思議とどこも開いていました。
まるで、そう。

みんながサンタクロースを待っているかのように。
みんながマトリンを待っていてくれるみたいに。

赤い大きな靴下を下げた窓辺を抜けるたびに、マトリンも嬉しくな
ってきました。幸せそうに眠る子供たちの顔を見ていたら、自然と
マトリンも笑顔になりました。

きっと、朝起きてすごく喜ぶんだろうな、そんなことを考えていま
した。

そうして、何軒も何軒も少し危ない目に合いながら、背の高いサン
タクロースと小さな赤いマントのサンタクロースはプレゼントを配
ってまわりました。

小さな街だと思っていたのに、こんなにたくさんの人がいるのね、
とマトリンは感心していました。そうして、クリスマスさんがこのお
仕事をしたいといっていた理由が分かった気がしました。

駅の裏手の小さな借家の赤ちゃんに、真っ赤な小箱を置いて外に出
ると。

クリスマスさんがぐんと伸びをしました。

ごちゃごちゃした通りも、今は真っ白に塗りたくられて、絵本の中
のようです。こちらを見て笑うクリスマスさんが言いました。

「楽しかった？」

マトリンは大きく頷きました。

「来年もサンタクロースと一緒にしたいわ、私、クリスマスさんとお
仕事するの」

ふと、淋しそうにクリスは微笑みました。

「さつき、ほら。見られてしまっただろう？小さな男の子に。だからね、僕も今年で最後だ。サンタクロースにはもう、なれない」

「え…？」

「でも最後だから、ちゃんと全部プレゼントを渡したかったんだ。あんなふうに誰かに見つかったりしまったりするから、サンタクロースも仕事が出来なくなって全員にプレゼントを届けられないことがあるんだ」

クリスは歩きながら話してくれました。

「ほら、普通はおじいさんだろう？けれど、今では建物は何階もあって登らなきゃいけなかったり、警察に追いかけられたりするからね。それに、子供が眠る時間が遅くなっているから、配れる時間が短くなっているんだ。大変になってしまったから、僕みたいな若いサンタクロースが増えていくんだよ」

「ふうん」

なんだか、夢のくせにずいぶん現実的だわ。マトリンはそれでもクリス兄さんの話を感心して聞いていました。

「毎年大勢のサンタクロースが採用されて、でも、僕みたいに子供に見つかってすぐに続けられなくなってしまう。解雇されるとね、サンタクロースだった時の思い出は消されてしまうんだ」

そこで、マトリンは気が付きました。

「ねえ！ねえ、クリス兄さん？もしかして、最初にクリス兄さんのサンタクロースを見つけてしまったのは、私？」

それには何も応えずに、クリスはニコニコ笑っていました。

私が眠らないで起きていたから。

だからあの時からもう、クリス兄さんはサンタクロースでいられなくなってしまったの？

サンタクロースのクリスマスさんはとても素敵でした。楽しそうでした。

なのに、私のせいで続けられない。

悲しくなって、マトリンは何も言い出せません。
もう、取り返しがつかないのです。

なのに、クリスマスさんはとても優しく笑ってくれます。

「さあ、そんな顔してないで。後一つだよ、マトリン。お待ちせしました」

「え？」

「君へのプレゼント、まだだったね」

そうしてクリスマスさんはマトリンの背中を押して、一緒に歩き始めました。

雪の中を、ぎゅ、ぎゅと小さな音を軋ませて。

そうして、二人がたどり着いたのは、狭い路地の先にある小さな一軒の家でした。

窓辺には小さなツリーとメリークリスマスの文字が吊られています。
そう、まだその部屋には灯りが点っていました。

「ほら、ここだよ」

「誰の家？」

「会いたかっただろう？」

そっと窓からのぞいてみました。

温かそうな小さなお部屋。リビングのようです。窓のすぐ近くには小さな、本当に小さなベッドが置いてあります。フワフワした白い毛布の中には誰もいません。ふらりと影が横切りました。

パジャマ姿の綺麗な女の人はまだ小さな赤ん坊を抱っこしていました。泣いている様で、高く上げたり、背中をとんとんしたり。その赤ちゃんを覗き込んであやしている、男の人。大きな背中。見たことがあります。あれは。

「パパ！」

マトリンは思わず声が出てしまつて、すぐに口を手で塞ぎました。

すごく幸せそうに、女の人と顔を見合わせて笑っている。

きゅん、と。

マトリンは唇をかみました。

「私は、会いたかったのに。クリスマスに会いたかったのに」
うつむいたマトリン肩をふわりとクリスマス兄さんが包みます。

「パパは、私には会いたくなかったの？」

「そんなことないと思うよ。ただね、たくさん家を見てきただろう？ いろんな家があつて、いろんな家族がいて。君のパパもここでこうして新しい家族を作つてる」

「クリスマスさん、ひどいわ。これ、こんなの。こんなプレゼントなんかいらない！」

マトリンは悲しくなつて、叫びました。

「マトリンはいい子だった？」

「え？」

背後のクリスを見上げると、やっぱりクリスは透明になりかかっていました。悲しそうに笑っています。

「マトリンは、この一年、いい子だったかな？」

クリスの瞳はじっと、マトリンを見つめました。それから、目をそらします。

「ううん。違うわ」

マトリンは足元の雪を、ブーツのつま先でツンツンとつつきました。

「私、悪い子だった。ママのこと、いつも苛めてた」

視線を落としてうつむくマトリンに、クリスは小さく頷いていました。

「パパに会えなくてママも淋しいのに、それでもママのせいだっていつもママを困らせていたわ」

「ママに会いたい？」

マトリンの足元には小さな涙の粒が落ちて、赤茶色のブーツにうつすら積もった粉雪を溶かして流れていきました。

「じゃあ、今度こそ、最後のプレゼントだね」

静かな夜明け。明るくなりかかる透明な空を、トナカイが横切ります。

小さな星が朝の風に消えそうになりながら、それでも光っています。マトリンはクリスに支えられながらトナカイに乗っていました。横向きに座って、ぎゅっと背後のクリス兄さんにしがみつきます。クリス兄さんの手がしっかり腰に回っているので怖くありません。

「ねえ、空を飛んだら見つかったらどうって」

はたはたと風に舞うマントを押さえながら、マトリンは一生懸命クリス兄さんの首に抱きつきました。少し、まだ少し涙が出る顔を見

られたくないのです。

「もういいんだよ」

これが最後の仕事だから？

マトリンは切なくなつて、また少し涙が出ました。

そうして、二人を乗せたトナカイはマトリンの家の前に降り立ちました。

とたんに朝日が金色に照らし、巻き上がった雪煙が風にふわりと立ち昇ると、トナカイとクリスマス兄さんを包みました。

「あ」

何もかも。

トナカイも、そしてクリスマス兄さんのサンタクロースも消えていました。

マトリンは一人雪の中に座り込んでいました。

「マトリン？」

二階のマトリンのお部屋の窓に、ママの顔が見えました。

それはすぐに消えて。

マトリンが立ち上がって膝の雪を払う時には、玄関の扉が開きました。

「マトリン！もう！どこに行っていたの！？心配したのよ」

ママが駆け寄って抱きしめてくれました。

赤いマントがなくなったマトリンは冷たい風に震えていたけれど、ママの胸は温かくて、クリスマスのひげと同じ少し甘い香りがしました。

「ママ、ごめんね」

マトリンは心からそう思いました。

心配したトーマスが駆け出してきて、キッチンでは伯父さんが温かいミルクを用意してくれました。泊まって行った従姉妹たちも叔母さんたちもお祖母ちゃんも、みんな起きていて、マトリンを囲んでテーブルに着きました。

そうして、マトリンが話すサンタクロースのお話を、じっと聞いてくれました。

「素敵な夢を見たのね？」

ママが笑います。

こうなるとマトリンには夢だったのかどうか分かりませんが、説明しても夢にしかないからそうしておきました。

夢だったんだろうって？

いいえ、きっと違います。

本当に 크리스兄さんの サンタクロースはいたのです。

だって玄関には、マトリンがいていた新しいブーツがキッチンと並んで置かれています。

「ね、クリスが最後にプレゼントしてくれたのはなんだったの？」

トーマスが聞きました。

「それは、秘密」

マトリンはパパに会ったことは話さないでおきました。

それは、クリス兄さんがくれたプレゼントを大切にしたいと思ったから。

みんなの笑顔を大切にしたいから。

それは、去年のクリスマスの出来事でした。

少少だけ大人になったマトリンは、今、ママと一緒にクッキーを形作りながら、クリスマス兄さんの帰りを待っています。

あれから二日後に帰ってきたクリスマス兄さんは、マトリンの話を聞いて不思議な夢を見たんだねと笑っていました。サンタクロースのバイトの話をして、ちっともわかっていないようでしたし、あの時言っていたように、お仕事を辞めたから忘れてしまったのかもしれない。

けれど。

マトリンは覚えているのです。

だから、クリスマスが帰ってきたらお部屋に入れてもらって、真っ赤な衣装があるかどうか。

確かめてみようと思うのです。

もちろん。大好きなクリスマス兄さんとおしゃべりするのが一番の目的ですが。

了

（後書き）

この作品は2007年のクリスマスのために書き下ろした短編童話です。

楽しんでいただけたら嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9296e/>

最後のプレゼント

2010年10月28日02時53分発行